

台湾における「嬰霊」の遡源：龍湖宮を手がかりに

著者	陳 宣聿
雑誌名	論集
巻	44
発行年	2017-12-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/00130357

台湾における「嬰霊」の遡源： 龍湖宮を手がかりに

陳 宣 聿

台湾においては、流産、死産、人工妊娠中絶された（以下は中絶¹）胎児や夭逝した子どもを「嬰霊」（※中国語：インリン）と呼び、特に中絶された胎児の霊が母にあたる女性や家族に祟ることが強調される。1980年代から嬰霊が親と家族に祟るという言説、及びその靈魂を慰撫する儀礼が広がりを見せ、とりわけ1980年代末から台湾社会に浸透していく。現在、台湾において数多くの宗教施設が嬰霊を慰める儀礼を行い、儀礼の様相も多様な形式がみられる。

嬰霊に関する信仰が台湾に広がった基礎には、胎児をいのちある存在と見なす観念があるといえるであろう。その概念の発生に関して、呉燕秋は墮胎史の角度から論じ、中絶の合法化にみなされた優生保健法の制定（1970年）と施行（1985年）を中心に分析した〔呉燕秋，2010：104－109〕。また、官曉薇は家庭観の変遷に着目し、家庭計画の実施、核家族化が進むと共に胎児への感情も変化が生じることについて論じた〔官曉薇，2009：168〕。

それでは、上述した観念が如何に「嬰霊」という言葉に統合されたのか。管見の及ぶ限りでは、「嬰霊」という言葉の広がりについて、台湾北西部の寺廟「龍湖宮」が重要な役割を果たしている。龍湖宮は「嬰霊供養の元祖廟」を自称し、「嬰霊」という言葉がその初代住職の造語であると主張している〔林健一，1996 a：60〕。ただし、現在「嬰霊供養の元祖廟」の名を馳せる龍湖宮は、はじめから夭逝した胎児や出生児を弔うために建立された宗教施設ではなく、むしろ成立と発展の中で徐々にその名を築き上げたのである。

1 本報告では、「中絶」という言葉を1985年に施行した優生保健法第4条の定義に従い、「医学上の認定を通して、胎児は母体以外で自然に命を保つことができない期間に、医療技術を用いて、胎児及びその付属物を母体外に排出する方法」を指すものとする（全国法規データベース：<http://law.moj.gov.tw/LawClass/LawAll.aspx?PCode=L0070001>，最終閲覧日2017/12/20）。ただし、優生保健法の施行以前の期間を包括する場合、もしくは宗教団体などが意図的に「墮胎」という表現を使用する場合については、「墮胎」という表現を用いる。

先行研究においても嬰霊に関する信仰に言及する際には、龍湖宮が常に対象として取り上げられてきた（例えば [Moskowitz, 2001], [生駒, 2003] など）。ただし、嬰霊が如何に龍湖宮と結びつけられるのかについては、議論はほぼ皆無であった。本論文の内容は筆者が2016年—2017年の間に行った龍湖宮での実地調査、及び1981年—2007の年間の龍湖宮による出版物の内容に基づいたものである。上述する資料の整理を通して、龍湖宮建立の経緯、そして当宮における嬰霊概念の生成を考察することによって、台湾における嬰霊に関する信仰の始まりを理解するための端緒としたい。

1. 「嬰霊」の概念について

1-1. 古典にない「嬰霊」という言葉

現在、台湾社会において「嬰霊」は夭逝した胎児や子どもの霊を意味する言葉として一般的に使用されている。先行研究では嬰霊を慰める儀礼の流行が1980年代半ばと指摘されていて（例えば, [Moskowitz, 2001: 38]），これ自体は同意できる主張であるが、ここでは「嬰霊」という言葉の特殊性に着目したい。すなわち夭逝した胎児や子どもの霊が「嬰霊」として台湾社会に広がり始める時点を検討していきたい。その言葉は、常に(1)中絶（墮胎）の罪、(2)現世における不調の説明、(3)胎児中心主義の言説²、の三つの概念が包括されると考えられる。

嬰霊という言葉の由来を探るため、筆者はまず先秦から民国までの古典資料を網羅した「漢籍電子文献データベース」³に「嬰霊」をキーワードとして検索をしたが、「嬰霊」という語彙が該当するものはなかった。また、15,106字の語彙（初版）が収録された三民出版社の『大辞典』初版（1985）と第二版（2000）

2 胎児中心主義の言説は、「胎児中心主義」は Hardacre の著作、『水子供養—商品としての儀式』の中に取り上げた「fetocentric」の訳語である。胎児の権利を主張し、母親の身体とは別の存在とされるものとする主張である [Hardacre, 1997: 251-258]。2017年に出版された邦訳本において、監訳者塚原久美はその言葉について検討を行い、米国のフェミニスト政治学者がプロライフ派に批判する際に用いた用語として知られるようになったという [塚原, 2017: 416]。

3 漢籍電子文献データベース: <http://hanchi.ihp.sinica.edu.tw/ihp/hanji.htm>（最終閲覧日: 2017/12/12）。中央研究院歴史言語研究所によって1984年から着手しはじめたデータベース。中国伝統の文献研究に価値のあるものを、経、史、子、集四部に分けて、現在（2017/12/12）計1,444件の文献が収録された。

に検索をしたが、何れも「嬰霊」という言葉は見当たらなかった。そして、新しい言葉の積極的な採用を特徴とする、学校の教科書、新聞記事での常用語、ある程度定着した慣用語句などが収録された五南出版社の『国語活用辞典』[周何他編, 2004: 1]において、第一版(1987)と第二版(1990)では「嬰霊」という言葉が収録されていなかったが、第三版(2004)ではじめて「嬰霊」が収録された。ただ、その解釈は「嬰兒の靈魂を指す」[周何他編, 2004: 548]という短い説明でしか記されず、出典も明示されなかった。従って、「嬰霊」は中国の古典にない言葉であることが推測できるであろう。

ただし、これは中国の古典において、夭逝した胎児や子どもの存在が全く無視するされていた訳ではなかった。歴史学者劉静貞は宋代(960-1279)の子殺しに関する研究を行い、墮胎や嬰兒殺しをすることは、「不孝」(孝: 養う, 不孝: 養わない)と言われ、筆記小説の中にも「不孝」をした女性が死後地獄に墮ち、小児達に囲まれた記録が多く見られる[劉静貞, 1998: 7-8, 31-36]。また、陳玉女は墮胎や嬰兒殺し(特に女兒)が盛んになる明代(1368-1644)の施餓鬼系の儀礼、水陸会における墮胎・産死者や胎児、幼児への弔いを検討した。陳は子殺しの風習を戒めるために作った善書(人々に善行を促す書籍)、歌謡を考察し墮胎・子殺しの残酷さや因果応報によって地獄に墮ちる教化の言説は、人々に負い目を感じさせる点を提示し、水陸会の儀礼の役割について論じた[陳玉女, 2006: 96-112]。劉静貞と陳玉女の論考の中に提示した罪悪感と因果応報の側面は、後に台湾社会で広がる嬰霊に関する信仰においても重要な部分であるが、「嬰霊」という語が使用されず、且つ現世で身の回りの不調と嬰霊の祟りと繋がる点は見当たらなかった。

1-2. 「嬰霊」という言葉の登場

嬰霊という言葉が一般的に知られる契機となったのは、恐らく1980年代末から発生した「嬰霊供養」の広告掲載事件であろう。

「嬰霊供養」の広告掲載事件以前に、夭逝した胎児や子どもの霊を指す特別な言葉が存在したか否かを断定することは極めて困難である。例えば、日本の「水子」に言及する際、現在ではほぼ「嬰霊」が定訳になっているのに対し、1981年及び1985年の新聞記事では、「嬰霊」という言葉が見当たらず、「胎児の

亡霊」,「水子」[笙旅, 1981],「超渡⁴流産児の亡魂の儀礼」[中央社・陳和美訳, 1985]などの表現が使用された。

筆者の調査によると,「嬰霊」という言葉が新聞記事で最初に登場する時点は1987年4月30日の『中国時報』,「本当に墮胎児の靈魂はあるか? 嬰霊供養の仕方」⁵という広告記事である。この記事を掲載したのは1986年に成立した仏教系書籍の出版社, 慈悲精舎である[慈悲精舎雑誌社発行, 1987: 60]。記事の冒頭で, 嬰霊という語について次のように説明させている「嬰霊とは, 墮胎, 流産もしくは夭折して, 慎重に埋葬をしなかった嬰兒の靈魂のことを指す」。その後, 夫婦の不仲, 子どもの非行などの祟りに言及し, 嬰霊を供養することによって祟りは加護に転じられるとを述べられている[作者不明, 1987]。慈悲精舎の「嬰霊供養」広告は後に複数回に渡って新聞紙に掲載され, 台湾社会に波紋を呼び, 主流な仏教団体による非難的となった⁶。

慈悲精舎の嬰霊の広告の掲載に対して, 1987年6月2日の『聯合報』では「怪しい嬰霊・見るも恐ろしい 水子を超度する 非道非仏」⁷と題する記事を掲載し, 率先して宗教の商業化や女性への脅迫という側面から非難の声を上げた。注目すべきは, 記事の中で, 嬰霊という言葉を取り上げる際, 括弧づけの表現が多く, 文章の中でも, 「…あやしい『嬰霊』」という語がはじめて台湾地区に現れることは, やはり見るも恐ろしいことであろう。…」などと述べられた[徐梅屏・王美麗, 1987]。1987-1990年の間, 慈悲精舎の「嬰霊供養」広告をめぐる事件は度々新聞に取り上げられ, それ以降, 「嬰霊」という言葉も広がっていったと考えられる。ここから推察すると, 1987年に「嬰霊」が中絶された胎児の霊を示す語として浮上した当時, その言葉はまだ社会全体に親しまれる言葉ではなかったことが分かった。

もちろん議論の余地は存在するが, 「嬰霊供養の元祖廟」と自称する龍湖宮は「嬰霊」を自身の造語であると述べた[林健一, 1996 a: 60]。確かに1984・1985年の龍湖宮の出版物では既に「嬰霊」の文字が確認され, 「嬰霊」という言葉の認識がまだ台湾社会に広がっていない1980年代中盤から, 龍湖宮はすで

4 超渡:「超度」とも。仏教, 道教用語で僧侶, 尼僧, 道士などが人々のために経懺を唱え, 亡霊を救い出すこと。[任繼愈など編, 1989: 833]

5 中国語原題目:「真有墮胎兒的靈魂嗎? 嬰霊供養辦法」(超度: 注釈4を参照)

6 主流な仏教団体側の意見は[釋傳法・釋性廣, 2009], [闕正宗, 2008]を参照

7 中国語原題目:「詭異嬰霊・怵目驚心 超渡水子・非道非佛」

に「嬰霊供養」を推進していることが分かる。そこで以下で龍湖宮自身の成立時間に着目し、そこにおいて嬰霊をめぐる観念は如何に発展したかを検討する。

2. 龍湖宮の建立

2-1. 龍湖宮について

龍湖宮は台湾北西部の苗栗県造橋郷龍昇村に位置し、西台湾を縦貫する道路、省道台1線が近くを通過していることもあって、台湾の北部と中部を中心に、全国各地からの参拝客が集まっている（図1）。龍湖宮は面積11ヘクターの湖、「龍昇湖」と隣接し、その寺廟名も龍昇湖から由来したものである。『龍昇村誌』によると、清代において、現在の龍昇湖は「大潭」（※中国語、「大きな淵」を意味する）と称され、周り一帯の地名も「潭内庄」と呼ばれていた。ところが、「潭内」は下に沈むように連想され、縁起があまりにも悪いということで、1950年全国的な行政区画の再整理を機に、地方の名士達は「潭内庄」から「龍昇村」への変更を申し出したという。新しい村の名前には村の運勢が龍のように天に登るようにという祈いが込められていた〔古煥明・陳鳳蘭，2013：2，20〕。村名の変更によって湖の呼称も変わり、それが間接的に「龍湖宮」名称の由来になった。

龍湖宮の主祭神は玄天上帝⁸であり、「道教」の寺院として宗教団体に登録された⁹。ただし、寺廟の管理を担ったのは道教の道士のような宗教的職能者ではなく、地方の知識人（特に初代住職林健一）が重役を務めていた。

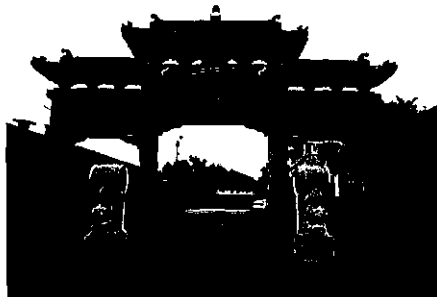


写真1. 龍湖宮の入り口（2016／8／13筆者撮影）

8 玄天上帝，北斗七宿の玄武が神格化され，さらに仏教・道教の潤色を加えた神〔鄭正浩，1994：131〕。1981年，台湾において玄天上帝を主祀する寺廟数は397件あり，王爺，觀音菩薩，天上聖母（媽祖），釈迦牟尼に次ぐ，寺廟の主祀神の第五位を占めた〔余光弘，1982：81〕。

9 内政部全国宗教資料サイト，宗教団体情報検索（<https://religion.moi.gov.tw/Religion/FoundationTemple?ci=1>），最終閲覧日：2017/12/16



写真2. 龍湖宮仁濟堂の入り口、左右両側は男女の仏童子像(2016/8/13筆者撮影)

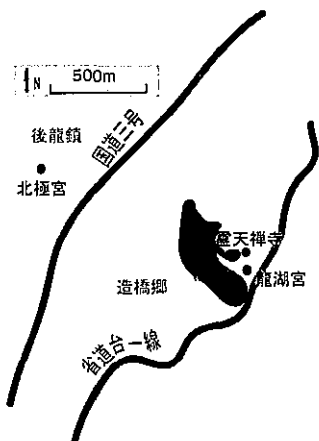


図1. 龍湖宮とその周辺(2017/12/20 GOOGLE MAPより、筆者再製)

2-2. 龍湖宮建設の縁起

龍湖宮の前史にあたる、主祭神玄天上帝の由来は近隣の二つの宗教施設、北極宮と靈天禪寺が関連している(図1)。

玄天上帝は元々北極宮の主祭神であり、19世紀から北極宮は地元の信仰の中心であった。1949年落慶した靈天禪寺は、建寺の土地選定において北極宮の協力を得たこと〔林寶釵編, 2014: 3〕を記念し、地元住民達と力を合わせて新しい玄天上帝の像を彫刻した。当初、その像を北極宮に奉納しようとしたが、この新しい像が元来北極宮に祀られている玄天上帝像より高いことに対し、北極宮の正殿内に安置するべきか疑問の声があがった。その後、北極宮内で玄天上帝の神示を受けた結果、奉納することを断念し、靈天禪寺近い空き地に簡素な祠を建て、その像を安置した¹⁰。祠の形で数年間が経過した後、1974年、退職した小学校の教員、林健一(後の龍湖宮初代住職)の関与によって、より本格的な宗教施設を建設する動きが始まった。

龍湖宮の初代住職、林健一(リンジェンイ, 1928-2007)は苗栗県の素封家林鐵貢¹¹の息子として生まれた。植民地支配の元で日本の教育を受けたため、

10 龍湖宮の建宮の由来などに関連する内容は、林健一の息子・龍湖宮現主任委員・林主任委員(以下は林主任委員)、龍昇村村長・陳村長、龍昇コミュニティ区長・古区長から多くの教示を頂いた。(当事者の意向のため、本文は苗字のみで表記)。

11 林鐵貢(1891-1952)、地元で糖業経営の名士。「龍昇村」の改名を申し出た一人でもある。〔古煥明・陳鳳蘭, 2013: 18,20〕

日本語が堪能であった。1945年林健一は中学校を卒業すると、同年から小学校の教員に就いた¹²。

教員を務める傍ら、林健一は様々な事業に手を出し、マッシュルームの栽培、ドライバナナの加工などに投資した経験があった。そして、家の近くに「二元亭」という名の食堂を開業したこともあった。当初は西台湾を貫通する道路、省道台1線に隣接していたので来客が多かったが、後に中山高速道路の開通につれて交通量が激減し、閉店したという¹³。1975年、47歳の林健一は学校を退職し、病気に罹った母親の世話をしていた。母親の病気に悩まされた彼は、靈天禅寺の近くにある小祠に祀られた玄天上帝に願掛けを行ったところ、母親の体調が奇跡的に好転したという。この出来事を機に、林健一は玄天上帝の利益を感じ、寺廟を建設しようと決心した〔林健一, 1996 a : 123-126〕。1976年、林健一の呼びかけで龍昇村内の有識者達を中心に「龍湖宮管理委員会」が結成された。土地の所有者である陳鶴年が主任委員として選ばれたが、龍湖宮内の運営に関わる実務は、林健一が担った〔林道玄, 1981 : 36〕。1977年には閉店した二元亭の跡地に龍湖宮の建設が決まり¹⁴、1978年3月26日、龍湖宮の正殿が落慶し、宗教施設として機能し始めた¹⁵。

2-3. 宗教的職能者の募集と儀礼の整備

地元の協力の要請、募金、土地の確保以外にも、林健一はまた外部の宗教的職能者の確保にも尽力をした。建宮の初期から大きく関わりを持ったのは鸞生（後述）の曾榮進（1914-1999）である。彼は13歳から扶鸞（後述）の訓練を受け、苗栗県において名高い靈地・仙山靈洞宮を始め、数多くの宗教施設の建設に携わった経験があった〔曾榮進, 出版年不明 : 24-25〕。

先述の扶鸞（フラン）とは、T字やY字型の枝を「筆」とし、沙盤に自動筆記によって神霊からの託宣を書く占術の一種である〔志賀, 2003 : 2〕。その原型は中国の六朝時代（3-6世紀）に遡ることができるが、明清時代（14-20世紀）から知識人・官僚の信仰として、盛んになり、地方社会に広く浸透し

12 龍湖宮のパンフレット（2017年4月16日、龍湖宮で取得）

13 2017年4月16日、林主任委員への聞き取り調査、龍昇社区發展協會看板よりまとめ

14 2017年4月16日、林主任委員への聞き取り調査。

15 『龍湖宮簡介』、出版年不明、龍湖聖訓雜誌社：6。

た〔許地山, 1966: 10-11, 32〕。後に、漢人の移民と共に扶鸞も台湾に伝わってきた。扶鸞の際には、一定の人数と手順が必要で、扶鸞を中心とする組織は「鸞堂」と称され、扶鸞を担う人々は「鸞生」と呼ばれる。鸞堂の活動は主に教化と救済の二つが中心で、前者は善書の出版など、後者は個別な依頼者の悩み相談（問事）や薬の処方を出すなど含まれる〔志賀, 2001: 244〕。

1975年、建宮の事務に関わった後、林健一は仙山靈洞宮に赴き、曾榮進の協力を要請した〔林健一, 不明: 9〕。正殿が落慶した後、曾榮進と仙山靈洞宮にいた一部の鸞生達は、活動の中心を龍湖宮に移した〔曾榮進, 出版年不明: 24-25〕。曾榮進は扶鸞のみならず、龍湖宮の建設や儀礼用の文疏のフォーマットの制定に大きな役割を果たした。宗教や寺廟の運営にまだ不慣れだった林健一にとって、曾榮進は貴重な相談役であった。

1978年の龍湖宮の正殿落慶以降、定期的な扶鸞が始まった。主祭神玄天上帝の入座と得道を記念し、毎年の旧暦3月26日-28日は春祭、毎年の旧暦9月9日-11日は秋祭を開催するようになった¹⁶。春・秋祭の際には、祖先や死者、嬰靈などを救済する儀礼を行い、儀礼を行う際に外部の宗教的職能者（仏教の僧侶・道教の道士）¹⁷を儀礼の司祭として招いた。

1988年、正殿の北側に4階建て¹⁸の「龍湖文教館」が落慶した。一階の仁濟堂と地下一階の感恩堂では太上老君¹⁹を始め、阿弥陀仏、地藏王菩薩、東嶽大帝²⁰、目連尊者など死者への救済に連想させる神仏が祀られ、嬰靈を含む祖先、個別の死者の位牌なども仁濟堂と感恩堂に安置されている。特に感恩堂は、現在嬰靈の位牌に特化した空間である。

2-4. 龍湖宮における「嬰靈供養」の儀礼

龍湖宮での「嬰靈」を慰撫する儀礼は「嬰靈供養」、もしくは「千日供養」

16 『龍湖宮簡介』, 出版年不明, 龍湖聖訓雜誌社: 6。

17 Moskowitzの調査(1996-1998年間)の中に、当時は仏教の僧侶と誦経団によって儀礼を行った〔Moskowitz, 2001: 105〕。2000年代中盤から徐々に道教式の儀礼に移行し、現在は道士の陳道長（当事者意向のため、名字のみで表記）に依頼するようになった。

18 二階「慈母堂」、一階「仁濟堂」、地下一階「感恩堂」、地下二階「福食食堂」。

19 老子が道教において神格化とされた時の尊称〔楠山, 1994: 369-370〕。

20 五岳の東岳、泰山の神格化。唐、宋では神号を与えられ、明・清では地獄を司る東嶽大帝として祀られた〔山田, 1997: 437〕。

と呼ばれる。それは嬰霊の氏名が記入された位牌を龍湖宮内の感恩堂に祀って、三年後にあの世に送り出す一連のプロセスからなっている²¹。期間中、依頼者は龍湖宮の「春祭」と「秋祭」に3年間計6回の祭に参加することが求められ、そして、第6回目の最終回の祭で、嬰霊の位牌（の紙）の焚き上げが行われる。これは嬰霊がこの世から離れることを象徴するのだとされる。

千日供養を始める前にまず嬰霊には氏名が必要とされる。1999年まで、曾榮進は扶鸞を通して嬰霊の前世の名前を見出すようにしていたが、現在は依頼者自身が嬰霊に名前をつけるようになった。



写真3. 嬰霊の位牌が安置された感恩堂
(2016/8/13筆者撮影)



写真4. 嬰霊の位牌
嬰霊の氏名が記された紙が位牌の中央に貼られている（2016/8/13筆者撮影・ほかしの加工）

3. 龍湖宮の出版物からみる嬰霊の概念の形成と発展

3-1. 龍湖宮の出版物について

玄天上帝への信仰から始まった龍湖宮は、どのように「嬰霊供養の元祖廟」になったのか。明確な始まりは特定し難いが、ここでは龍湖宮の出版物から発展の軌跡を推察することを試みたい。

21 儀礼の詳細について、また別稿で論ずる予定である。



写真5. 龍湖宮出版物 (2017/12/23筆者撮影)



写真6. 龍湖心霊百科 (2017/4/16筆者撮影)

宗教施設と儀礼が整った後、林健一は出版物の発行に着手した。1980年代から龍湖宮少量な書物を出版し（詳細は注釈25を参照）、1985年には「龍湖聖訓雜誌社」が設立され、3ヶ月ごとに定期的な出版物を刊行するようになった（写真5）。2007年の林健一逝去までは、これらの書物は人々に無料で配布された。それらは苗栗県のみならず、自動車で台湾の北部と中部に配送され、他の寺廟に置かれたりや住宅ビルのポストに入れられたりしたという²²。

1983年に龍湖宮によって発行された『玄天上帝救世真經』の付録において、林健一は「靈」の影響を論じ、祖先をはじめ、墮胎・流産・夭折した男児、女児を意味する「天靈」を祀る必要性も取上げた〔林健一、1983〕。そして、1984年発行と推測される²³『靈障と因果』（靈障與因果）では、「祖靈」と並んで、はじめて「嬰靈」という言葉を使用し、その靈障について述べている²⁴。ここで天靈から嬰靈に変化した理由は不明であるが、少なくとも1985年定期的な出版物の刊行を始めた際には、「嬰靈」という語が既に使われていたことが分かる。これら大量の書物の配送によって、嬰靈に対する認識も広がっていったと考えられる。

22 2017年4月23日、龍湖宮の従業員林氏（当事者意向のため、苗字のみで表記）への聞き取り調査。

23 明確な発行年が記載されていないが、書籍の内容から推察すると、1984年に撮影された儀礼の写真が掲載され、且つ「墮胎はまだ違法で、無免許医師で委託するしかない」という記述が存在し、優生保健法施行（1985年）以前の時点に発行された作だと考えられる。そこから推測すると、1984年に発行されたものだと考えられる。

24 『靈障と因果』、1984年出版（推定）、龍湖宮発行

現在、筆者は龍湖宮によって出版された著作物111点²⁵を確認している。内容の重複したものもあり、号数によって構成も異なるが、大抵、①教化（曾榮進の扶鸞による神々からの道徳的訓示）、②問事（曾榮進の扶鸞による依頼者の悩み相談と神々の回答）、③霊（林健一によって著作・編集された「霊」に関する解説）、④宮務（龍湖宮の行事案内、儀礼・境内の紹介、助印者一覧…）、⑤その他（目次、読者の寄稿、新聞記事などの掲載…）の五つの部分によって構成されている。

1985年以前から1990年までの出版物は曾榮進による（①教化）と（②問事）の部分が強く見えるが、（③霊）に関する論考も存在し、各主題の配分は比較的に均一だった。それに対して、1991年から1999年の出版物は殆ど林健一の編集・著作による（③霊）に関する論考へと変化している。以上の点を踏まえた上で、筆者は特に曾榮進による（①教化）と（②問事）の内容と、林健一の編集・著作による（③霊）の論考に着目し、「嬰霊」に関する概念の変化を分析していきたい。

3-2. 曾榮進：因果応報と嬰霊の前世

曾榮進の扶鸞によって書き下ろした（①教化）と（②問事）の両方とも、神仏のメッセージを七文字からなる「詩」の形式、やや文語的に表現している。前者（①教化）の方には道徳的教訓が込められ、降りてきた神仏が人々に善行を勧めたり、龍湖宮が人々を教化する天命を担うことも説かれている。例えば、1979年初版の『玄天上帝救世真經』は曾榮進の扶鸞に基づいた善書であり、玄天上帝、太白金翁（李白）などの神仏が降臨して、訓示を下したという。『玄天上帝救世真經』の冒頭では当世の腐敗が語られ、龍湖宮は風紀の乱れを正し、人々を救済する役割を持つことが語られる²⁶。また、曾榮進の扶鸞によって書き下ろされたもう一冊の善書、『普濟金箴』では、神仏だけではなく、亡くなっ

25 筆者が確認できた出版物は1981年版（1979年初版という）の『玄天上帝救世真經』が最初であり、1985年に龍湖聖訓雜誌社が設立の前には計4点の出版物だけが確認できた。1985年から1999年の間は基本的に3ヶ月ごとに発行していたが、場合によってカバーを変更して増刷することもあった。龍湖宮の出版物は1985-1999年間に発行したものが多数を占め（1985-1990年28冊、1991-1999年57冊、出版期間不明13冊）、2000年代以降は9点しか確認できなかった。

26 『玄天上帝救世真經』、1981/3/3（旧暦）、龍湖宮印刷

た人間も登場し、自身の人生を語った場面が存在した。その内容を概観すると、この世で不遇や苦難に遭っても、悪行をせず、家庭の価値を守った善人²⁷は、輪廻の苦から逃れ、死後神や仏になる可能性が提示された。その反面、暴行、盗み、親孝行をしていないなどの人は、輪廻で貧乏や不具の人間に生まれ変わり、もしくは畜生道に陥ることになる²⁸。即ち、この善書には因果応報の思想が著しく反映され、生前の善悪が死後に清算される側面を強調している。

後者(②問事)の方は、上述のような完結した世界観を描くことより、個別の依頼者の悩みに応じて神義を伺うことを目的としている。龍湖宮は身体の不調や家族関係の支障、不運、子どもの非行などの悩みを「悪報」と見なし、その悪報に至る「原因」を、前世(もしくは何世か前)の所作からはじめ、祖先の悪行、嬰靈などに帰結することが多い。以下で二つの事例を取り上げる。

【事例一】台湾南部の彰化から来た30歳の女性²⁹

依頼原因：腹痛

依頼者に返答する鸞詩³⁰：

轉眼三十到來臨 偷閒拜佛好修身

※間もなく三十歳になり 修身するために礼仏の時間を作るべき

三十八方水燉服 向善修功解嬰靈

※(漢方薬)薬方の三十八方を水で煎じて飲むべき 善行を行い功德を修することで嬰靈との因縁も解かすであろう

姓繆玉賢潘玲玉 虔誠善解且留心

※嬰靈の名は繆玉賢と潘玲玉であり 敬虔の心を持ち 嬰靈との因縁を解かすことを心掛けるべき

累世業愆善解脱 可望前途一路平

※世々からの業を適切に解決できれば 先行きも平安に進めるであろう

27 親孝行をし、子どもを成人までに育て、長寿で家族の囲みで亡くなったことなどが望ましい。

28 『妙玄』、出版時間不明、龍湖宮所蔵より、筆者整理、要約

29 『龍湖聖訓』1988年3月5日発行

30 中国語の原文を載せ、筆者が内容の説明を※の後に記入している。【事例二】も同様。

【事例二】台湾北部桃園から来た19歳の女性³¹

依頼原因：貧血、悪夢

依頼者に返答する懺詩：

年來小運未得時 氣血欠調脾胃虛

※近年運のめぐり合わせがよくならず 氣血の調和が欠けて、脾臓と胃臓が衰弱している

婦科十四四十六 倫理道德不可違

※（漢方薬）婦科の十四と四十六方 倫理と道德に違反しては行けない

勿吃牛犬多放生 累世冤親善解之

※牛肉と犬肉を食さないで 何世前からの因縁も適切に解決すべき

嬰霊詹榕黎玉純 前世恩怨蔡集琦

※嬰霊の名は詹榕と黎玉純であり、前世、蔡集琦という人と因縁を持っている

事例一と事例二を通して、体の不調や悪夢などの悩みの原因を、身体の不調和、前世名を持つ嬰霊、他に何世から累積した因縁がある霊などと判断された。解決方法として、修身、薬方の授与、嬰霊、冤親債主との和解（即ち、龍湖宮で儀礼を行うこと）が提示された。悩みや不調を持つ依頼者は（嚮生を介して）、道德的な存在である神からの訓示を得る。心身の不調、不運などとして表面化した悩み事の背後には、常に依頼者自身の道德、前世の所業など複数の原因が絡み合う事が発覚する。こういった神仏の訓示によって、因果関係が明らかになり、前世や現世における不徳、因縁によって現在の悩みや不調の形と表現されることが理解されるのである。

「千日供養」をする前に、初期の龍湖宮では、必ず扶鸞を通して「嬰霊の前世の名前を見出す」ことが要求されていた。依頼者は事前に中絶や流産の経験を告知する必要があるかどうかは不明であるが、上述の語りの構造において、（②問事）による嬰霊をめぐる語りは常に「前世」との関係性を意識していることが分かった。『靈障と因果』によると、嬰霊は祖先や冤親債主（因縁を持つ霊）の生まれ変わり、もしくは前世（もしくは何世前）で何らかの目的を持っているから、受胎を通して依頼者の側に来るという³²。中絶の罪も語りながら、

31 『龍湖聖訓』1988年7月15日発行：56-57

32 『靈障與因果』、1984年出版（推定）、龍湖宮発行

受胎の原因を通して依頼者の悩みを因果関係の中に包摂する傾向が大きく見える。

ただし、曾榮進亡くなった(1999)後、後継者がいなかったため、龍湖宮での扶鸞は停止せざるをえなかった。

3-3. 林健一：嬰霊という「霊」

神仏を介して権威が付与され、常に道徳的な訓示と前世との関わりで悩みの原因を説明する鸞詩と異なり、林健一による③「霊に関する解説」はより口語的な表現が使用され、現代社会の生活と一層密接に説明されている。1996年、林健一は嬰霊、開運、祖先の祀り方、憑依現象、恋愛など、現代人の関心事と深く結びつく物事を題材に、全24冊の「龍湖心霊科学百科シリーズ」(写真6)を出版した。出版の自序において、林健一は自身が神仏との交流ができる「通霊者」であることを否定し、本の内容はほぼ自分の十数年来龍湖宮で勤めた経験を活かすものであると述べた[林健一, 1996b : 6]。

嬰霊に関して、林健一は以下のように述べている。

「…俗に言う『鬼』。宗教にいう『魂』。心霊科学にいう『霊』。そのため、昔の經典には嬰霊の二文字はなかった。嬰霊は『胎魂』と『夭折児』を包括する。言葉の風体を意識し、作者(※林健一)は慎重に『嬰霊』の二文字を作った。嬰霊は供養者がいないため『無縁霊』になり、即ち俗に言う『無祀孤魂』(※祀り手のない死者の霊)のことである。仏教と道教の中に、『無祀孤魂』に超抜する³³儀礼があったため、『嬰霊』の存在を証明することができる。日本では『水子霊』と呼ばれ、現代科学の原子力のように、文明の風潮で生じた新名詞で、古代もその言葉はなかった」[林健一, 1996a : 60-61]

この文章で、林健一は嬰霊を自身の造語であると述べている。林はその概念と仏教や道教といった既成宗教との関係を否定しないが、祀り手のない「無祀孤魂」に包括された胎児や子どもの霊を拡大し、既成宗教と一線を画した「心霊科学」の立場から嬰霊を論じた。龍湖心霊百科の序文において、彼は著書の

33 注釈4、「超度」を参照

最終目的は「神頼みの法則」[林健一, 1995], 「自分でできる霊病の診察」[林健一, 1996b] など, 超自然的な存在の規則を導き出すことと述べている。

林健一が強調した「心靈科学」の背後には日本の新宗教教団の出版物の強い影響を受けている³⁴。ここではその詳細について具体的に言及することは控えるが, 中でも島藺進が指摘した「都市型教団の精霊信仰」の特徴が反映されていると考えられる。島藺によると, 大本教, 生長の家など都市型教団の精霊信仰は以下三つの特徴がみえる。(1)「霊界」という身近い他界の存在を強調し, 神や仏よりも, むしろ守護神, 邪霊, 祖先など, 理想化されていない霊に力を入れる。(2)不幸の要因として, 霊の影響が取上げられる。(3)呪術的な儀礼によって霊と交流する実践が盛んになり, 霊の「憑依」以外, 現世の不幸を解決する手段としての「供養」も強調される³⁵ [島藺, 1992: 159-160]。林健一の著作の「嬰霊」の概念も上述の特徴が見られる。

林健一は様々な霊が漂う「霊界」の存在を描き, 不幸を起こす霊の一種として嬰霊を取り上げた [林健一, 1996a: 114-119]。著作によって表現の仕方は異なるが, 嬰霊は常に恨みや嫉妬が溢れている霊³⁶と, 他界で苦しんでいる霊³⁷という二つイメージと結びつけられている。嬰霊はその家族に対する復讐と自身の苦境からの救済を求めるため, 心身の不調, 会社の倒産, 不妊, 子どもの障害や非行などの「霊障」を起こすという [林健一, 1996a: 114-119]。また, 嬰霊の性質を陳述する説明以外にも, 著作の中に大量の「実話体験」を収録することが特徴となっている。子育てに悩まされた母親 [林健一, 1996c:

34 注目すべきところは, 林健一は新宗教教団の出版物から数多くの影響を受けたが, 彼自身は特定な宗教教団に属するのではなく, 台北にある日本の書籍を扱う書店で本を購入し, 知識として吸収したという点である (2017年4月16日, 林主任委員への聞き取り調査)。そして, 著作, 編集にあたって, 台湾の「霊能者」達の著作もまた参考にされる。霊をめぐる理論を構築する際に柔軟性を持っているといえる。

35 他方, 信者自身の手によって霊との交流や供養を果たすという都市型教団の精霊信仰の3点目の特徴 [島藺, 1992: 160] と異なり, 龍湖宮では霊との交流, 不幸の解決手段としての「供養」を強調しているが, 宗教的職能者の介在が必要とされた。

36 恨みと嫉妬の原因は, 「中絶=殺人」の図式に基づいた殺された被害者意識, そして生まれなかった自分と生まれてきた兄弟姉妹に対する嫉妬などがある [林健一, 1996a]。

37 「他界」の描き方も著作によって異なり, 奈河橋 (1985/12/1『龍湖聖訓』), 嬰霊空間 (1987/7/15『龍湖聖訓』) などがあり, いずれにしても他界に行けず, さまよう状態として描かれる。

100-102], 悪夢に悩まされ中絶経験を持つ女性 [林健一, 1996 a : 53-58], 数多くの女性に中絶させ不運に悩まされた男性 [林健一, 1996 a : 44-47] など掲載され、具体的な経験談を通して、人々の共感を呼びかける役割を持つと考えられる。

超自然的な力を介して、悩みや不調の原因を説明する「靈障」は、曾榮進の扶鸞による(②問事)にも類似点が見られるが、その構造には違いがある。扶鸞のような神仏を招く専門的な技法が必要なく、人々の不調は異なる種類の「靈」の仕業と結び付けられ、靈の性質を把握することによって対処方法も分かれる。即ち、林健一が提示した靈界の言説は、「知識」を通して靈界の法則を把握することに重んじる。

ただし、林は靈の知識を提示したものの、自身は宗教的職能者ではないため、儀礼を執り行う際に鸞生や道士などの宗教的職能者に任せ、嬰靈の性質を語る言説、及びそれを慰める儀礼との間には、隔たりが存在している。

むすび

本研究は流産、死産、中絶された胎児や夭逝した子どもの靈を総称する「嬰靈」の觀念の発生に着目し、特に龍湖宮における嬰靈の概念の形成と変化について検討を行った。嬰靈をめぐる語りは、常に(1)中絶(墮胎)の罪、(2)現世における不調の説明、(3)胎児中心主義の言説、の三つの概念が包括されると考えられる。

宋代、明代の文献において、墮胎を戒めるため(1)中絶(墮胎)の罪を語る内容があったが、ほぼ死後、臨死の際に応報で罰を受けることが語られ、(2)現世における不調の説明として現れなかった。上述の三つの特性を持つ「嬰靈」という言葉が台湾社会に認識されるようになる契機は、1980年代末、「嬰靈供養」の広告掲載の一連の論争と関係していた。それに先立ち、1980年代半ばごろから、龍湖宮は「嬰靈」の概念を組み立始めた。

現在「嬰靈供養の元祖廟」と自称した龍湖宮は、建宮当時から嬰靈を強く推し出すのではなく、むしろ地方における玄天上帝への信仰がより重要であると説く。1980年代中盤あたりから夭逝した胎児や子どもを意味する「夭靈」に着目し、後に定期的な雑誌の発行と共に「嬰靈」をめぐる概念を推進していた。

龍湖宮における嬰靈の概念は、初代住職林健一と、外部から要請鸞生、曾榮

進に強く影響された。曾榮進は扶鸞によって神仏の訓示を受ける以外、依頼者の悩み相談を応じる「問事」も行い、はじめから(2)現世における不調の説明体系として存在する。その語りの中に、悩みや不調の原因は、依頼者個人の前世、祖先、嬰霊、因縁といった超自然的な力に帰結する傾向がある。曾榮進は神仏の力を介して問題の判断を行い、そして扶鸞を通して嬰霊の前世名を探し出すことが重要視された。他方、小学校教員を退職した後に、林健一は自身の地方社会での影響力から、龍湖宮の初代住職になった。超自然的な力と交信する力を持たないが、豊富な投資経験と語学能力を駆使し、彼は日本の新宗教教団などを含む出版物を通して、霊の実存と霊界の法則を見出す「心靈科学」の角度から嬰霊を論じた。林健一が描いた嬰霊像は、(1)中絶（墮胎）の罪、(2)現世における不調の説明、(3)胎児中心主義の言説の三つの概念を包括した。特に(3)胎児中心主義の言説を通して、夭折した胎児や子どもを総括する言葉、嬰霊、の出現は画期的であった。中絶（墮胎）の罪としての因果応報も語られるが、嬰霊という「霊」によって現在の身の回りの不調や不運を引き起こした側面は無視することのできない部分である。他方、言説と儀礼の執行には隔たりが存在するため、恨みや嫉妬が溢れ、他界で苦しんでいる子どもの霊イメージも後に他の宗教施設に取り入れられ、台湾社会に拡散されいき、多様な嬰霊を慰める儀礼を展開したと言えるであろう。

参考文献

- Moskowitz Marc.L. 2001. *Haunting Fetus: Abortion, Sexuality, and the Spirit. World in Taiwan*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Hardacre Helen. 1997 *Marketing the menacing fetus in Japan*. University of California Press.
- 余光弘 1982 「台湾地区民間宗教的發展」『中央研究院民族学研究所集刊』(53): 67-103
- 任繼愈など編 1989 「超度」『宗教詞典（下）』博遠出版: 833
- 島蘭進 1992 『現代救済宗教論』青弓社
- 許地山 1994 『扶箕迷信底研究』台灣商務印書館
- 鄭正浩 1994 「玄天上帝」野口鐵郎など編『道教事典』平河出版社: 131
- 楠山春樹 1994 「太上老君」野口鐵郎など編『道教事典』平河出版社: 369

- 370

- 山田利明 1994 「東岳」野口鐵郎など編『道教事典』平河出版社：437
- 生駒孝彰 2003 「台湾における嬰靈供養」『宗教と倫理』（3）
- 志賀市子 2003 『中国のこっくりさん—扶鸞信仰と華人社会』大修館書店
- 志賀市子 2001 「近代中国における扶鸞結社運動——台湾の鸞堂を中心に——」『講座 道教 5 道教と中国社会』雄山閣出版：237-258。
- 關正宗 2008 「台湾當代『嬰靈』供養的歷史與爭辯」『台灣佛教史論』宗教文化出版社：375-394。
- 釋傳法，釋性廣 2009 「社運浪潮中之護教運動——以中國佛教會護教組為探討核心」『玄奘佛學研究』（11）
- 官曉薇 2009 「反身的凝視：台灣人工流產法制及其法社會背景的分析」『思與言』47（4）：135-189。
- 吳燕秋 2010 「西法東罰，罪及婦女——墮胎入罪及其對戰後台灣婦女的影響」『近代中國婦女史研究』（18）：53-121。
- 陳玉女 2006 「明代墮胎，產亡，溺嬰的社會因應——從四幅佛教墮胎產亡水陸畫談起」『成大歷史學報』（31）：65-112。
- 古煥明・陳鳳蘭 2013 『龍昇村誌』（第二版）（龍昇社區所藏）
- 林寶釵編 2014 『靈天禪寺沿革』靈天禪寺發行
- 塚原久美 2017 「監訳者あとがき」ヘレン・ハーデカー著『水子供養—商品としての儀式』：413-423。

【辭典類】

- 三民書局大辭典編纂委員會 1985 『大辭典』（初版）三民書局
- 三民書局大辭典編纂委員會 2000 『大辭典』（二版）三民書局
- 周何他編 1987 『國語活用辭典』（初版）五南圖書出版
- 周何他編 1990 『國語活用辭典』（二版）五南圖書出版
- 周何他編 2004 『國語活用辭典』（三版）五南圖書出版

【龍湖宮出版物】

- 林道玄 1981 「龍湖宮沿革」『玄天上帝救世真經』，龍湖宮印刷
- 林道玄 1983 「靈？靈魂—善神 惡魄—鬼」『玄天上帝救世真經』，龍湖宮印刷
- 林健一 1995 『凡人如何求財求神求福報』明生出版事業公司

林健一 1996 a 『嬰霊與家運』 明生出版事業公司

林健一 1996 b 『祖先與我』 明生出版事業公司

林健一 1996 c 『靈異靈界実相』 明生出版事業公司

曾榮進 出版年不明 『妙玄』 龍湖宮所蔵（序文の日付から、1996年と推定）

林健一 出版年不明 「序」『妙玄』 龍湖宮所蔵（序文日付から、1996年と推定）

【龍湖宮出版物（善書・小冊子）】

1981／3／3（旧暦）、『玄天上帝救世真經』、龍湖宮印刷

1983／3／4（旧暦）、『玄天上帝救世真經』、龍湖宮印刷

出版年不明、『靈障と因果』、龍湖宮仁濟堂編集（1984年出版と推定）

1985／12／1 『龍湖聖訓』・龍湖聖訓雜誌社出版

1987／3／1 『龍湖探討靈界 墮胎與嬰霊 給婦女の一本參考書』 龍湖聖訓雜誌社出版

1988／3／5 『龍湖聖訓』・龍湖聖訓雜誌社出版

1988／7／15 『龍湖聖訓』・龍湖聖訓雜誌社出版

出版年不明、『龍湖宮簡介』、龍湖聖訓雜誌社出版

【新聞記事】

不明 「真有墮胎兒の靈魂嗎？ 嬰霊供養辦法」『中国時報』 1987年4月30日

徐梅屏・王美麗 「詭異嬰霊・怵目驚心 超渡水子・非道非佛」『中国時報』

1987年6月2日

吳鈴嬌 「墮胎冤魂托嬰所」『時報週刊』（606号）1989年10月14日

中央社・陳和美訊 「為流產兒超渡亡魂 日本寺廟大發利市」『民生報』1985年10月3日

笙旅 「『水子地藏』の哀悽」『民生報』 1981年3月19日

【インターネット資料】

漢籍電子文獻データベース (<http://hanchi.ihp.sinica.edu.tw/ihp/hanji.htm>),
閲覧日2017/12/12

全国法規データベース: (<http://law.moj.gov.tw/LawClass/LawAll.aspx?PCode=L0070001>), 閲覧日2017/12/20

内政部全国宗教資料サイト: (<https://religion.moi.gov.tw/Religion/FoundationTemple?ci=1>), 閲覧日2017/12/16

本研究は平成29年度 JSPS 科研費 課題番号16J00744の助成を受けたものです。

謝辞

本調査を行うにあたり、龍湖宮の主任委員林主任委員を始め、龍湖宮の関係者の方々、龍昇村・コミュニティの方々に多大な協力を頂きました。そして、中央研究院民族学研究所の丁仁傑先生から龍湖宮に関する蔵書や数多くの資料を拝借させて頂きまして、付して感謝します。

The concept of unborn dead in Dragan Lake Temple with special reference to the phrase “Yingling”

Chen Hsuan-Yu

In Taiwan, the phrase *Yingling* (嬰霊), literally 'infant spirit', means spirits of miscarried, stillborn or aborted fetuses and sometimes babies who died in their infancy. Thought to be vengeful spirits which will come back to haunt its mother or family, a memorial ritual to appease *Yingling* was often deemed necessary. Although the belief of *Yingling* is regarded as a new religious phenomenon which grew in popularity during the late 1980's, little attention has been given to the origin of this belief. I attempt to analyze the problem of origin through an examination of Dragon Lake Temple (龍湖宮), which had initiated a memorial ritual to appease *Yingling* before the late 1980's.

This article can be divided into three parts. In the first part, I emphasize the origin of the special meaning for generic unborn dead and young infants with the particular term *Yingling*. In the second part, the history of Dragon Lake Temple is discussed. In the third part, I give an in-depth review of how *Yingling* evolved, through publications of the Dragon Lake Temple.

As a result of the above discussion, we learn the following information.

1. The concept of *Yingling* did not exist (or at least was not complete) in 1975 when Dragon Lake Temple started construction. Instead, the concept gradually developed and formed until the mid-1980's.
2. At Dragon Lake Temple, the discourse about haunting, which causes illness and misfortunes, was affected by the tradition of spirit-writing (扶鸞) and the statement of spirit, which specifically came from new Japanese religions and a reinterpretation by the master at Dragon Lake Temple.
3. The statement of spirit made the possibility of *Yinglings* existence a new type of spirit. A spirit described as vengeful and pitiful soon spread throughout Taiwanese society.